

科学技術高校

生徒による

いきものの記

Vol.162 2025.10.27

1年1組 鳥居 幸永
(科学研部生物化学班・昆虫研究)

ムシムシムシムシムシ どうも鳥居です。いきものの記を見ているみなさん、こんにちは！今年から新しく科学研部生物化学班の一員となった鳥居幸永と申します。僕からは日本の「里山」を紹介したいと思います！なぜかと言うと、僕は小さい頃から家族で栃木県の里山に通い、田んぼのオーナーを務めているからです。

まず、皆さんは里山をご存知ですか？里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域です（写真1）。簡単に言えば、「農家さんが生活するために作った環境」のことです。田畑を耕して、火をつけるために必要な薪や商売のための椎茸をつくるための木を植え、それらを農家さんが管理し続ける。この環境が現在とても減少しており、生き物のすみかとして保全されるようになってきました。「なんで農家が人間のために作った環境を生き物のために保全する必要があるんだ！」とおっしゃる方もいると思います。実は里山は多くの生き物に利用されているのです。例えば、農家さんが植えた木々が作り出す雑木林。多くは落葉広葉樹という秋に葉を落とし、夏に新芽が出る木々です。落葉広葉樹は多くの生き物が生息するのに適した環境を作り出し、例えばクワガタ類（写真2）やカブトムシ、タヌキなどが好みます。また、水田では蚊の仲間が産卵をするために集まり、その成虫、幼虫を食べにカエル類やトカゲ、トンボの仲間などが集まり、それを食べに大型の水生昆虫やサギやサシバなどの鳥類、蛇が集まります。このように里山は多くの生き物にとってなくてはならない場所となっています。

しかし、農家の減少や高齢化、後継ぎ問題などで里山は数を減らしつつあります。さらに、多くの生き物が利用する田んぼのあぜ（田んぼの水が外に出ないようにするための土を盛った区切りのような場所）をコンクリートで固めてしまったり、虫を殺す農薬を撒いたりするなど生き物が暮らしにくくなる環境が増えてしまっています。この問題は「環境問題」と「社会問題」のどちらの要素も含むため長年議論され続けています。その中で挙げられた解決策の一つに「農業体験として人とお金を集めて多くの人にこの現状を知ってもらおう」という取り組みがあり、僕はまさにそれに参加しています。そして今年の7月には科研部の虫班の同級生や先輩をこの里山に案内し、みんなで生き物の採集と農業体験に行きました。（写真3,4）

里山に行くと、僕達のような生き物が好きな人は、生き物単体を見るだけではなく、周りの環境も見なければならないということをととても感じます。読者の皆さんにもこの現状を知っていただけたらと思います。



2：水田の近くにある雑木林で採集したクワガタ。
左：ノコギリクワガタ 右：ミヤマクワガタ

里山フィールドワーク 農家が残した自然 日本の里山！①

1：僕が通っている栃木県のとある里山の風景。農家が薪に使う木が生える雑木林、稲を育てる水田、水田に水を入れるために使う小川があるのがわかる。



3：科研部虫班のみんなで田んぼの草刈りをしている様子。田んぼでは定期的な管理が必要になる。



4：里山の水田で採集した水生昆虫。タガメやゲンゴロウ、ガムシなどが入った。これほど種類が多いのもこの水田が生物のことを考えて様々な取り組みをしているからだ。